
睡魔を誘う暖かいとある朝

黒川九夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡魔を誘う暖かいとある朝

【Nコード】

N0122Q

【作者名】

黒川九夜

【あらすじ】

何気ないいつもの日常。それが壊され非日常に。それでも適応した静観、楽観主義の主人公をお楽しみください？

（前書き）

ジャンルがわかりませんでした（爆

ファンタジーかSFで迷いましたがわからなかったのとおりあえずファンタジーへ。なんだかごめんなさい（・・・；

あ かんけないぜ！知らないっ！ドマイw みたいな人はドゾー（

睡魔を誘う暖かいとある朝。俺は通学に使う電車にいつものように乗ろうとして、嫌な予感がして一瞬固まる。

「きゃっ」

すると、後ろの人が俺にぶつかってきた。というか、電車待ちで並んでるのに止まったらぶつかるに決まっている。聞こえるかわからないくらいのでかい声で一言謝り急いで電車に乗る。そして、さっきの嫌な予感は気のせいだったと決めると、心地よい睡魔がまた襲ってくる。

「…いつも通りつまらない一日かな」

そうつぶやき目を瞑ると、睡魔に身をゆだねる。すると、突然体は宙を舞う。何が起きたのかまったくわからないが、視界の端にほんの一瞬、一人の女の子と目が合う。目が合うとほぼ同時に、衝撃と轟音が俺の体ごと車内を貫いた。

俺は気がつくと、真っ白な空間に居た。本当に真っ白としか、言いようのない空間。雪山で起きると聞くホワイトアウトという現象と、同じ状態が目の前に広がっていた。

「…ここはどこだ？」

俺はさっきまで、電車の中にいたはず…あ、でも体が飛んだから…などと混乱状態にある頭を落ち着かせつつ状況整理をしていると、不意に背後から声がかかった

「もしもし」

「!？」

びっくりして飛びのく。目の前に居るのは見たことのない女性…というよりは少女のほうが合っている気がする。

「あ、驚かせてしまいましたか」

「ああ…大丈夫。それよりここはどこですか？……俺は死にましたか？」

少女は一拍おいて、それでは一つずつ答えていきますね。と丁寧に答えた。

「まず一つ目、ここはただ選択するための場所で特に意味はないのですが、強いて言うのなら現世とあの世の狭間みたいな感じです。では二つ目、あなたはさきほどの電車の脱輪事故で一度死にました。」

『死にました。』という少女の言葉が胸に刺さる。…大したダメージは無かったのだけれども。てか、やっぱり脱輪事故だったんだなあ…とか思いつつも少女の言葉を聞く。

「だから、あなたはここにいます。」

少女は両手に小さな拳を作って、俺の目を見据える。正直これだけじゃ、状況を整理しようにも難しい。

「…死んだからここにいます…って意味がよくわからないだが」

「あ…少し省いてしまいましたね。ここは選択する場所だと言いましたよね？」

その問いに、ああ…と相槌を打つ

「ではその選択を…聞きます。あなたは生き返るチャンスが欲しいですか？」

俺は少女の言葉を聞き、生き返りたい、と即答できなかった。信じられなかったとか驚いていてではなく、だ。もし万が一生き返っても、俺にはやりたいことが見当たらなかったからだ。それなら死んでしまうのもいいかもしれない…。

「どうしたのですか？あ、まだ記憶に混乱とか状況についてこれないとか、ありますか？」

いつの間にかうつむいていた俺の顔を心配そうに覗き込んでいた少女。その少女に俺はせつかくだけど生き返らなくていい、と伝えるために、息を軽く吸うと目が合った。その刹那、俺が死ぬ直前の記憶を思い出す。そしてなぜか、死んだ後の自分の姿も写る。そし

て俺は、こうはつきりと少女に伝えた。

「生き返りたい。生き返らせてくれ」

そう言ったあと、目の前の少女も聞き取れないくらい小さな声でボソツと呟く。何で俺は忘れていたんだろう…と。

俺は少女に手を握られ 何でもはぐれたら見つけるのが大変だからとか言いくるめられ 白い空間を歩いていると、突然目の前がただでさえ白いのに更に白く光り思わず目を瞑る。次に目を開けるとそこはよく知っている、というか生まれ育った町だった。

「あれ、ここは…」

「はい。あなたがさっきまでいた町です。正確にはあなたが事故死したのが現世で、今私たちが居るのは仮の世とか呼ばれるそうです」少女は平然と補足説明をしてくれるが、そんなのは俺の耳には入らない。俺は驚くのを通りこし、もう訳がわからない。誰か俺にどうやったらこうなるのか、説明してくれ。軽いパニック状態にある俺をよそに、少女は綺麗な夕日ですねーとか言っているけど、俺の耳にはやっぱり届いていない。やっと俺の状態に気がついた少女が、心配そうに言葉をかける

「えっと、大丈夫ですか？」

「…たぶん…大丈夫」

少女はアハハと笑うと、両手を少々物足りない胸のあたりであわせ明るい声で続ける。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は梨菜^{リナ}と言います。あなたの名前を念のため…」

きつとその後「教えてください」とか続いたんだろう。しかし間が悪く、俺の腹の虫がグーと邪魔をした。

「…とりあえず、なんか食べない？腹、鳴っちゃったし」

リナと名乗った少女は可愛い笑顔を浮かべ、元気な返事をしてくれた。

夕食には少々早かったので、色々話を聞きながら、どこにもあるファーストフード店で軽く食べ、あとは家でしっかりと食べることにした。

「初めてって話だったけど…そんなによかった？」

リナは白い空間にずっと居たわけではなく、しっかりとした住居地があり、そこに住んでいたらしい。その自分の居たところには、ファーストフード店が無くて新鮮だったらしく、リナはハンバーガーを食べてからとっても上機嫌だった。

「はい！とっても美味しかったですよ！お肉とお野菜にソースをかけてパンではさんだだけなのに、なんであんなに美味しいんでしょうかね！」

と、さつきからずーっとハンバーガーを褒めちぎっているワケだが。あ、鼻歌まじりにクルクルと回り始めた。…ハンバーガー一つで、そんなに幸せになれるのが羨ましい。皮肉ではなく本当に。そんなふうにいるながら彼女の仕事を眺めていると、不意にリナがぴたっと止まり、路地裏を見つめる。見つめるその顔は、少し青ざめているように見えた。

「どうしたの？」

片手を口元に持つていき、さっきまでの元気がウソのように弱々しく、あれ…と路地裏を指差す。そこには二、三人で一人を殴っている絵ができていた。いわゆるリンチかカツアゲだろう。この辺だとちょこちょこ見かけるのだが、始めて来た少女にはキツイ光景だった。

「っ！あまり見ないほうがいいよ」

とつさにこれ以上は見せまいと、リナの肩をつかみ有無を言わさずに歩き始める。少女の肩は、唇は、全身は、小刻みに震えていて目の焦点も合っていなかった。その姿を見て、自分の不注意を殴りたくなった。俺はその時、気がつかなかった。グループの一人が口

元に不適な笑みを浮かべ、こちらを見ていたことに。

「ついたよ」

あれからほとんど口を開くことも無く歩き続け、気がつけば家の前。しかし、少し様子がおかしい。四人家族で必ず人が居るとは言えないにしても、もうあたりは暗くなっている。けれど、家には明かりの一つもついていない。人の気配すら、感じられなかった。まだ誰も帰ってきてないだけだろう。少女一人連れてきたわけだし、事情を話すと長く…あれ、SFとかファンタジーの域じゃん。どうすんだよ…。とか不安になりつつも、カギを開け家に入る。一階建ての借家は四人で暮らすのに最低限の広さはあるものの、割りと年期が入っているのでお世辞にも綺麗とは言いがたい。

「リナ？大丈夫？」

「あ…はい。大丈夫です。その…邪魔します…」

口では大丈夫と言っているがその声は小さく弱々しい。いや、尾を引きすぎだろ…全然大丈夫じゃないな…。リナの心配をしつつもとりあえずリビングに案内しようとした時、携帯が鳴る。

『一人暮らしも一年と半分が過ぎましたね。一時はどうなることかと心配していましたが、無事にここまでこれで安心していきます。いつものように仕送りを入れておいたので、確認しておいてください。母より』

という文末にあるように、お母さんからのメールだった。あれ？一人暮らし？仕送り？ええ！？昨日までは確かに四人家族で暮らしていたのに…あれ。いつの間に俺一人になったんだ！？あれええ！？？本日3回目のパニック。それに割と早く気がついてくれたリナは、携帯の本文を見て、あれ？一人暮らしだったのですか？と聞いてくる。俺は四人のはずです、と即答してお母さんに電話しようとアドレス帳を開いたが。

「あ、待ってください」

リナに止められる。

「たぶん一人暮らしと言うことになっているのは、少しずれたからだと思います」

「ずれ？」

「簡単に説明すると、ゲームとかで出てくるバグのようなものです。これくらいなら特に気にする必要は無いかと」

確かにこれはこれでいいかもしれない。家族と距離が多少離れたところで、今は何の問題も無い。リナも居るし、面倒な説明もしなくていい。心配なことがあるとすれば…。

「夕飯どうしようか？」

その言葉に、リナは驚いた顔をしていた。

「今回は適応が早いですね。あ、料理は好きでやっていたので、私を作ります。というか食べ物ばかりですね」

そう言つて微笑む。久々に、と言つても二十分そこらだが。リナの笑った顔を見た気がする。

「時間がある時は、しっかり食べるって決めてるんだよ」

「いい心がけですね」

リナは笑い続けながら、台所お借りしますねー、と家の奥へ入っていく。それに軽い返事をする。あ、でも…冷蔵庫に食材があるんだろうか…？

奇跡的に食材が死んでない状態で冷蔵庫に入っていて、美味しい夕飯を楽しめた。リナイわく、簡単な牛肉の炒め物とポテトサラダらしい。食べた後に、風呂に入ってさつさと上がる。話があるから部屋で待っていてほしいと、入れ替わりに風呂へ向うリナに真剣な目つきと声で言われた。部屋で待つてくれて言われてもなー。正直だった一日で色々あり過ぎて疲れた。なんだか安心すると、思わず欠伸がもれる。近くにあったマンガを手に取り、ベットに横になる、と 俺は目を瞑った瞬間に寝てしまった。

「はあっ…はあっ…」

ひたすら俺は全力で走っていた。なぜこんなにも全速力で走っているのかわからない。ただわかるのは、逃げていることだけ。しかし、体の限界は既に来ていて、足はガタガタで左右にフラフラ。肺は酸素が足りないと、焼けるような痛みで悲鳴を上げる。それに加えて頭にも酸素が足りていないのか、ぼんやりとして考えることができない。そんな状態でやることは、わかることは、ただ一つ。『逃げる』今にも倒れそうな状態で長く走っていられることも無く、不意に体のバランスが左に片寄り倒れ、2回転くらいして止まる。何が追ってきていたのか確認するために、後ろを振り向くと

「…いじょ…ですか…大丈夫ですか？」

「…っはあ…はあっ…はあ…」

夢…か…。どうやらリナが起こしてくれたらしい。でも俺の心臓はさっきまで本当に走っていたかのように、激しく鼓動を打ち息も荒く、さらには手汗に寝汗。なんか凄い状態になっている。とりあえず落ち着けるために横になって気を静めていると、頭上から言葉が降ってくる。

「大丈夫ですか？」

「ああ。だいじょ…リナ、近い」

目を開けたら、視界いっぱいにはリナの顔。たぶん、俺の体の上に四つん這いになってもなっているのだろう。五cmくらい頭持ち上げたら確実にぶつかる。むしろ当たってやろうかと考えて止める。

「大丈夫だから、一旦どいて…」

心配そうな顔をしつつも、夢中だったのか意図的なのかわからないくらい近かった顔が離れる。

「とりあえずシャワー浴びてくる。」

そう言ってリナを残して時々ふらつきながらも、一人浴室に向かう。あーくそ…なんで朝からこんなに疲れてんだ…。

シャワーを浴びて戻ってくると、リナが朝食を作っておいてくれたのでそれを食べ、昨日聞けなかった話をしてもらう。ちなみに平日で授業があるのだが、仮病の演技を入れて電話をすると、あっさりと休むことを了承してくれた。

「昨日、あなたは生き返るチャンスをもたらってこの世界に来ましたね。ところで、今日どのような夢を見ましたか？」

俺は簡単に説明を、いや、一言だけ、逃げている夢だったと伝えた。

「逃げていますか。あなたにはこの世界に来たときから一つ有能力をもらっているはずで、その夢はその力のヒントになるはずなのです」

「力、か…例えばどんな？」

「私が知っているのは身体的に現れるということで、精神的にはほとんど出ないということも聞きました」

「身体的で、精神的にはほぼ出ないか。夢の内容は逃げていて、自分の足で逃げてるから能力はほぼ足で決定かな」

軽く整理して適当に考えた結果を少々早口に言い終えると、リナが少し驚いていた。

「え。どうしたの？」

「いえ…やけに頭が回るのですね。驚きました」

「一晩寝たら耐性ついたのかな。それに」

そこで一度言葉を切って、リナの方を見て少し笑って言う。

「朝から美味しいの食べたから、目が覚めてるんだよ」

リナは料理が褒められたと気がつき、少しほほを赤くして照れている。でも、目が覚めた原因の七割ほどは、いきなりよくわからない悪夢？を見て、さらに一気にシャワーの蛇口をひねったら全身に

冷水を……。自分の不注意にあきれつつも、よく目が覚めたんだ。とかもう絶対に言えない。

「あっ、少し話がずれましたね。それで、その力を使って戦うんです」

「え。戦うの？」

路地裏を見ればリンチとか見る町で生まれ育ったが、自分自身、人を殴ったことなんて一度も無い。そんな自分が戦闘か。……正直勝てる気がしない。そんなことよりも。

「何でそれを最初に言わないんだよ……」

先に言われていれば、多少は心構えが違ったかもしれないのに。いや、やることには変わりがないのだけれども……。

「すみません……その時、私も頭真っ白で……それでも頑張ってたんですよ！あ、それですね。はい。戦います。戦うんです」

弁明を並べたかと思えば急に淡々と喋ったりナは、ただ……といきなり声を弱めた。

「ただ？」

「戦う相手がわからない上に、制限時間はこっちに来てから三日間です。……残り二日です」

二日という言葉に少し悲しくなる。なんだか余命宣告された人の気持ちがあった気がする。悲しくなっているにも、余命二日には変わりが無い。

「……相手はどうしてもわからない？」

リナはうつむき、沈黙する。戦う相手がわからなくて、制限時間は残り二日。仮に相手がこの町に居ても、二日だとムリがあるな。特徴も何も無いから探しようがないし。なら、話は簡単だ。

「よし。ムリだ」

情報が少なすぎる。無駄な努力は、極力避ける。それが俺のポリシー。

「ええ！？そんなにあっさりと……必ず一つは方法が……」

リナは俺のムリ宣言に、弱々しくも食い下がる。

「相手の特徴は？」

あう…と再びリナは沈黙する。

「だろ？というわけで…リナ。行きたいことがある？」

遊園地に行きたいですと言われ、俺たちは電車をいくつか乗り継ぎ、大型の遊園地まで来ていた。しかし、リナは行きたいと言っていた遊園地を目の前にしても、素直に喜んでいいのか迷っているようだった。それを見て一つため息をつき、リナの頭をわしやわしやと撫で回す。

「わっ！何するんですかつ」

「せっかくここまできたのに迷ってるなよ。もう俺は、残り二日間遊ぶって決めたんだからさ」

それでもリナは、でも…とまだ迷う。ああ、もう…。

「そんなに迷っても時間は戻らないし、止まりもしない。ほら、時間がもったいない。行くよー」

そう言つてリナの後ろに回り、どうしても進もうとしない背中を押して進んだ。

始めは複雑そうにしていたリナもアトラクションに何度か乗ると楽しくなってきたようで、そのまま文字通り時間を忘れて遊びまわった。そして気がつけば、あたりは暗くなっていた。

「あ。結構暗いね」

「ほんとですね。建物が明るくて、気がつきませんでした」

ハッとして時間を見ると、いつの間にか九時過ぎ。今から夕食をとつても、終電に乗らなくても大丈夫な計算になった。

「そろそろ帰るよ。腹減ったし、食べてから電車乗ろうか。何が食べたい？」

リナは疲れを知らないのか、まだはつきりと元気な声で返事をし

てくれる。

「はいっ！ハンバーガーがいいです！」

「え。昼飯もそれだったじゃん。夕飯は変えようか」

「えー…なら私が作ります」

「それは嬉しいけど、家に帰るまでに俺の腹がもたないから却下」

二回否定するとリナからブーブーと文句が飛んでくるが、それを軽くいなして考える。最近はパンと米ばかりだったな。たまには麺類…パスタとかがいいな。伸びないし。そういうことで、どこにでもあるようなファミレスに入り、俺はタラコスパゲッティを、リナはやっぱりハンバーガーを頼んだのだった。

行きと逆の道順をたどり、家まで歩いて三十分ほどになった。

「近くまでバスがあつたらよかったんだけどね…」

「無いのですか？」

「さすがにこんな時間まで走っていないからさ」

時間を確認すると十二時前。思っていたよりも、遅い時間になってしまっていた。

「そう…ですか。ふあ…」

朝からテンションが高くなっていたリナはさすがに元気が無く、眠そうに欠伸を一つ。そういう俺も、歩き詰めでさすがに足が疲れた。今夜もよく眠れそうだと思いつつながら伸びをすると、リナを挟んで一台の黒いワゴン車が止まり、ドアが開き手が伸びる。

「きゃっ!？」

車内に突然リナが引きずり込まれ、車は発進する。車内からは助けて！と泣きそうなりナの声が聞こえた気がした。

「え、ちよっ!？」

いきなりすることにパニックになりつつも、走り出した車を追いかけて全力で走る。予想した力が足で当たりなら、止まるまで尾行するつもりだった。しかしいくら全力で走っても、距離は詰まるどころ

かどんどん離れていく。そして、一つ角を曲がると完全に見失う。

「くっそ……！」

乱れた呼吸を整えつつも、思わず叱咤する。落ち着け、落ち着くんだ、冷静になれ、焦ったら負ける。この当たりの地理は頭に入っている。静かで人の来ない場所は……よし。とりあえずどんな車かは覚えていりし、行くであろう場所の目星はついた。そして、後で必ず返すからと呟き、自転車を拝借して全速力で走り出す。

真っ先にここだと思った場所に向かっている時、横目に止まっている黒ワゴンを見かける。すぐに車内を確認するが、誰も居ない。周りを見ると、すぐ横に小さな廃墟があった。俺の記憶では、ここには普通の民家が建っていたはず。これもきつと、リナの言う『ずれ』なのだろうと思いビルに入……らない。とりあえず、外から中の様子を伺う。マンガとかだと叫びながら突っ込むシーンだろうけど、そんなアホなことする気は無い。

「……！！」

中からは三人くらいの声がした。内容はわからないけど、一つはリナだ。感情的になり突っ込みそうになる自分を理性で押さえ込み、先に警察に電話する。電話し終えて助けに行こうとすると、体が固まった。少なくとも三人はいるであろう場所に、一人で突っ込むのか？たとえ一対一でも勝てる見込みゼロなのに……。それに待っていても、十分くらいで警察が着てくれるはずだ。だから下手に刺激せず、静観していても大丈夫なはず……。そんなことを考える。けれど、行かないといけない。合理的な考えが、自分の今までの生き方が、壁に、鎖になって邪魔をする。そのジレンマに苦しんでいると、微かに声がした。耳を澄ます。どうやら裏口のドアを挟んで聞こえるようだ。

「……せ……一日だ……好きに生きないとな！」

最後がやけに大きな声だった。なんだか自暴自棄の人に巻き込ま

れたみたいだ。なんと迷惑な。しかし、これだと尚更ヤバイ。リナに何をされるかわからない状態で、俺は飛び出すことができない。

『何するんですか！』

『……！』

『………助けて……っ！』

っ……！

その言葉に、行動を制限していた理性の鎖が千切れる。裏口のドアを蹴り壊し、その音で気がついたリナに迫っていた半裸の男を蹴り飛ばす。リナと転がっている男の間に入り、リナに逃げるとサインを送る。戸惑いながらも逃げていくのを肌で感じながら、男に向き直る。

「何してんだテメー」

自分でも驚くくらい、低く黒い声だった。しかし、男は起き上がリながら不適な笑みを作る。理由はすぐにわかった。ガラの悪そうな男が奥から三人入ってくる。さらに裏口から二人。しかも逃げたはずのリナを肩に担いでいた。

「ふふふ…抵抗したらその子がどうなっても知りませんよ？」

半裸の男が言い終える前に走り、掴みかかってくる三人の腕を自分でもどう動いてるのかわからないが、するすると避ける。

「黙れ変態」

そう小さく吐き捨て二発目の蹴りを浴びせる。が、そこまでだった。足を振りぬいて止まると同時に、三人に抑えつけられる。俺、格好悪…。半裸の男は立ち上がり、かなり不機嫌そうに俺を見て踏みつける。

「そのガキは好きにしてください。その子は手足を縛ってこちらへ」
そう言って自由を奪われたリナをずるずると引っ張り、部屋から出て行く。ドアが閉まると同時に俺は殴られ、蹴られ、痛みで意識が遠くなる中、パトカーのサイレンを聞いた。

目が覚めるとそこは、無機質な白い天井が広がる病室だった。

「あれ。どうしたんだ、俺。何でこんなところに…」

そう思いながら起き上がろうとすると、全身に痛みが走る。その痛みで前夜の事を思い出す。痛みを無視して起き上がると、ベッドの傍らにリナがいた。リナはすやすやと気持ちよく寝ていて、目じりは少し赤くなっている。きっと心配で泣いていて、泣き疲れて寝たんだろうと思うと、少し微笑がこぼれてリナの頭を撫でる。撫でているとドアが開き医者…には見えない人が入ってきた。

「目を覚ましたかね？」

「ええ。でも、あなた…医者では無いですよね？」

医者なら白衣を着ているのが相場だ。でもこの老人は自分の身長ほどもある杖を持ち、白い服を着ているがそれはローブだった。

「ほう。すぐ気がつくか。割と気がつかないものなのだな」

まあ、だがそんなことはどうでもいいのじゃ。と付け加えて、そのおじいさんは前夜のその後と俺の状態とかを教えてくれた。あの後警察が来て男六人を逮捕して、倒れていた俺とリナは保護された。リナは俺が病院に搬送される時に、付き添うと言って聞かなかったそう。俺は全身打撲に肋骨の骨折らしい。現世に戻ったら全部直すそうだが…。俺が拝借した自転車の持ち主に警察が行き、事情を聞いた持ち主は『その子は知り合いで、自転車は私が貸したんですよ』と笑顔で言うてくれたそう。俺はその言葉を聞いて、目じりが熱くなつて泣きそうになった。と、そこまで言い終えたおじいさんは、少女の名前を呼び起こす。

「ふあ…あ、おはようございます…。あ、おじいちゃん」

「うむ。おはよう。じゃがな、普段はおじいちゃんと呼ぶなとあれほど…」

「あ。すみません…おはようございます、神様」

どうやらリナのおじいちゃんらしい。て言うか神様？

「神様？」

「いかにも。さて、お主がパンクする前に用件を言うかの。少年よ。」

お前は見事試練をこなし、生き返るチャンスを得た。そこで、じゃ考えたらパンクするのでとりあえず全部信じることにして、一つ質問を。

「待つて。俺は何にも勝ってないよ？相手も知らなかったし」

「相手は自分自身じゃよ。屁理屈にしか聞こえないかも知れんが、一番ちようどいいハードルは自分自身じゃからな。よく三日間で来たの。ほとんど合格したものはいないのにの」

こちらの意見をまったく言わせない威厳のあるしゃべり方で、そこでじゃ、とおじいさんは付け加え、たっぷり一拍あけて爆弾発言をしてくれた。

「娘を預かってくれぬか？」

「は？」

「だいぶお主に懐いている様じゃしの。そろそろ少年の世界に、現世に送ろうと思ったのだが、スタートがどうしても傷つきやすいから」

リナ無視でがんがん会話が進む。むしろ、俺の都合とかも全部無視されている気がする。それでも思考がパニックで止まりそうになるのをどうにか抑え、助けを求めてリナのほうを見ると、自分がどうなるのかわかっているのか黙って俺の様子を静観していた。じーっと見つめられている。その目を見て、言葉が出なくなった。そんな子猫みたいな目で見つめるな…。はぁ…。もうどうなっても知らね…。

「……そちらがいいのなら…いいですよ」

「ふむ。決定じゃ」

久しぶりに目の前が真っ白に光る。そして、俺は電車事故の前の朝をまたやり直すのだった。あの子にまた会えると信じて。他に変わったことといえば一つ。

「兄さん！朝ですよー」

そう言っ
て部屋のカー
テンを開けて
くれるリナ。
一つ下の妹が
出
来ました…。

（後書き）

この作品はC79にコピー本としてさりげなく出させていただいたものです。

もうひとつのが行き詰っているし、せつかくだったので投稿しました。

少しだらだらと話を。

最近やつとPSSを買い、ずっとやりたかったAcfAを買ったんです。

グラフィックいいよーすごいよー！全力でやったら2時間で頭と（なぜか）肩が痛くなるくらい。頭はどちらかと言うと疲労感が多かったです。だって遠近法で小さくなってる敵が見えない。スピードが速すぎて自機は画面から逃げる。もちろん敵も速いから見失って見つけるのに一苦労。そら疲れるわな…。

まあ冬休みと言うのもあって1週間くらいやり込みました。現在6週目。時間を無駄に過ごしてるなーとか思いつつもやりました。きつとまだまだやるよ！

さて。つかみどころの無い本文に加え、こんな後書きまで読んでくださりありがとございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122q/>

睡魔を誘う暖かいとある朝

2011年1月9日14時25分発行